

子どもの病気とくすり

くすりを与えすぎていませんか？

★**子どもの病気**の多くは、かぜ症候群や嘔吐下痢症などのウイルス感染症で、たいていは自然に治ります。そして、子どもは自分で病気を治す力をおとなよりつよく持っています。だから、いつもくすりが必要というわけではありません。子どもが病気のときは、きげん・元気・食欲・すいみんなど、子どものようすをよく観察しましょう。熱があっても元気、せきや鼻水があってもよく眠る、このようなときは、家庭でようすをみてもよい場合です。



★くすりが必要になる場合

①病気の症状をやわらげたいとき

病気のつらさを軽くしてあげることも大事な治療のひとつです。

熱が高くきつがる、鼻水がとまらない、せきがひどくて眠れない、吐き気がつづく、下痢がひどい、頭が痛くがまんできないなどの場合は、くすりで症状をやわらげてあげましょう。

- ・熱さまし(解熱剤)・・・水分が飲めない・とてもきつい・眠れないときに、頓用で使用する。
- ・吐き気どめ・・・吐き気・嘔吐がつづくときに、症状がよくなるまで使用する。
- ・鼻水・せきどめ・・・指示された回数を症状がよくなるまで服用する。
- ・下痢どめ、整腸剤・・・指示された回数を症状がよくなるまで服用する。

②細菌などの病原菌を取り除き、病気を治すため

かぜに細菌感染を合併したとき、細菌による中耳炎や肺炎を起こしたとき、溶連菌感染症などになったときには、抗生物質が必要になります。

抗生物質は細菌をやっつけるとても大切なくすりです。安易に使いすぎると、抗生物質が効かない耐性菌を増やすことになります。

かぜ症候群や嘔吐下痢症などのウイルス感染症には、抗生物質は必要ありません。単なるかぜのときは、安易に抗生物質を与えないことが大切です。

- ・抗生物質・・・指示された回数と日数をきちんと飲む。自己診断で中止してはいけない。どうしても飲めないときは、医師や薬剤師と相談しましょう。

③慢性の病気を治療する

ぜんそくや心臓病などの病気は、くすりによる管理が治療の大きな柱です。経過がよくても定期的に診察を受け、自己判断でくすりを中断してはいけません。

★家庭でのケアが大切です

熱が高いときは水分をこまめに取り安静にする、下痢のときは食事に気をつける、湿疹でかゆいときはスキンケアと塗り薬をぬるなど家庭でできるケアをしっかりとしましょう。くすりを与えるとともに、家庭でのケアは大切な治療です。

裏へつづく

★上手に飲ませるための工夫・

くすりにには、飲みやすい薬と飲みにくい薬があります。どんなくすりでも上手に飲める子どもと、どうしても飲まない子どもがいます。飲みにくい薬をより飲みやすくする工夫と、飲まない子どもへの援助を考える必要があります。

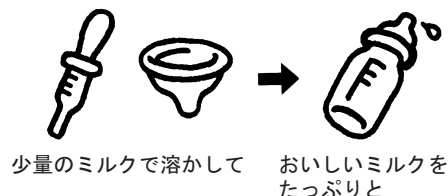
①くすりを与えるときの基本的なルールと工夫

- 子どもがくすりを飲めたら、かならずほめてあげましょう。
- 食前それとも食後？
 - ・子どものくすりは、授乳前や食前が原則。食後は満腹で飲まなかったり、食べたものといっしょに吐いてしまうことがある。
 - ・食後の指示がある場合は、食事がとれなくても飲み物といっしょに与える。
- 1日2回のくすりは？
 - ・朝と夜おおよそ12時間毎に与える
- 1日3回のくすりは？
 - ・食前3回でもよいが、起きている時間を三等分して与える。
- 乳児にくすりを与えるときは、主食であるミルクにはまぜないようにしましょう。
 - ・くすりを飲まないだけでなく、ミルク嫌いになる危険がある。
- 年齢に合った飲ませ方の基本をマスターしましょう。



【乳児の場合】

- ・水薬は、そのまま与えるか、スポイトや注射器で少しずつ口の中へ入れる。
- ・粉薬は、だんご状にして上あごにつけ、おっぱいといっしょに飲ませるか、一口で飲める量に溶かしてスプーンで与える。



【幼児の場合】

- ・水薬も粉薬もそのまま与える習慣をつける。
- ・嫌がるときは、子どもの好きなものにまぜて与える。

アイスクリーム・ゼリー・パン用のチョコクリーム
ヨーグルト・つぶしたバナナなどがお勧め



②飲まない子どもへの工夫と援助

- 1歳～2歳の子どもの場合
 - ・子どもの好きな味のフレーバーをまぜ、いやな味を感じにくくする。
 - ・アイスクリームなどにまぜるときは、本人にわからないようにする。
 - ・敏感な子どもの場合は、まぜてないアイスを一口服えてからまぜたアイスを与える。
 - ・朝と夜で味やまぜるものを変える。
 - ・おちょこやカップゼリーの容器など子どもが興味をしめす道具を利用する。
 - ・水薬は、カステラなどにしみ込ませて食べさせる方法もある。
- 3歳以上の子どもの場合
 - ・飲めない理由をいっしょに考え、飲みやすくする方法を探してあげる。
 - ・きょうだいなど家族の協力を得て、家族のまねをしたい気持ちを利用する。
 - ・決して、飲めないことを叱ったり、無理やり飲ませようとしたりしてはいけない。
 - ・飲もうと努力したら、上手く飲めなくてもほめてあげる。
 - ・上手く飲めたら、ほうびのシールを使うのも有効である。
 - ・ままごと遊びで「お医者さんごっこ」をして、お菓子のくすりで母親や人形に飲ませて遊ぶ。
 - ・絵本などを利用し、くすりの必要性をよく理解させ、くすりを飲む約束をさせる。
 - ・日頃の子どものコミュニケーションやしつけの仕方を、もう一度見直してみる。
- どうしても飲まない場合は、もう一度医師や薬剤師に相談してみましょう。
 - ・くすりによっては、まぜるものでにがみが増すことがある。
 - ・飲み薬以外の治療があるか考えてもらう。

